

「平和大使として学んだこと」

ぼくが見た、80年前の広島

向小金小学校 5年 氏名 丸山 善 暉



「平和大使」を終えた今、ぼくが強く思うことは、世界の戦争は、始まってしまつて終りなくなつてしまつから、平和を願つて戦争をしないしてほしいということだ。ぼくがでさることは、クラスでけんがが起つた時、声をかけて話を聞いてあげることだ。二人が落ち着いて、仲直りができるように行動していききたい。

原爆ドームを見て、ぼくは、原爆のいれを感じた。顔や体にガラスが飛び散つた人達は、ぼくが想像もできないくらい痛くて辛かつたのだらうと思う。

資料館で一番心に残つたのは、ボロボロの服と三輪車を見たことだ。まだ小さかつた子どもがさくなつて、三輪車だけが残つてかあゝいそうに感じた。そして、黒い雨のことだ。原爆投下後、生きていた人達は体が熱くてのどがかわいて、水を求めていたそうだった。その時にうつてきた雨をみんな飲んだそうだった。でも、その雨には、放射性物質が含まれていて

多くの人々がさくなつてしまった。水を求めて川に飛びこんだ人達もいて、川には、たくさん人の人が折り重なつてさくなつた。もしぼくが、八十年前の八月六にもどれるのなら、きれいな水をたくさん運んでみんなに飲ませてあげたい。のどがかわいているのに、きれいな水を飲めない人がたくさんいたことがかわいそうだし、本当に悲しい。

被爆体験伝承者の高橋つおさんの話を聞いて、心に残つたのは、原爆投下後、やけどを負つた人達は、やけどを負つた所に油をぬつて空気にふれないようにしていた、という話だ。その時は薬がなかつたので油をぬつてたがまんしていた。薬がないのにがんばつてたゝて生きようとしていたのがすごいと思う。

ぼくは、この出来事をみんなにも知つてほしいと思う。学校では詳しく習わないことだけれど、とても大切なことだから、ぼくは広島で学んだことをみんなに伝えていきたい。みんなが平和にくらせる世界になつてほしい。

「平和大使として学んだこと」

平和な世界にするために

おおぐろの森小学校 5年 氏名森 奏登



今、平和な世の中ですね。そしている。私たちが
できることは何だろうと考えていました。

広島での平和大使としての場で、被爆体験伝
承者のお話を聞いて、ものすごくおそろしい
なと思いました。建物を開を12、14オなの
に、ていたソした。し、ういだんが使われて
し、ういだんとは油がたくさん入っているの
で、ひどいなと思いました。一ぱつのぼくだ
んで広島市中の全ての場所がぼく風などてこ
われてしまうのはひやんだなと思いました。

どうすればこの悲劇をなくすことができる
のだろうか。と広島派遣終わ。てから考えてい
ました。けれども世界中で戦争だらけなので
平和とはほど遠いところがあります。今もテ
レビのニュースでは戦争のことがたくさん報
道されています。平和大使になる前までは戦
争のニュースを深く気に止めなかつたですが、
平和大使をした後は戦争のニュースを見るた
びに、心がいたみます。そして平和大使とし
て、夏休みが後に発信してきたいと思います。

クラスメートのみんなにかくついたり、は、と
てもおそろしいこと、戦争はぜ、たいにして
はいけないうことを、伝えていきたいです。戦
争をしないうためにはちやんと相手のことを分
かり合える気持ちや、話し合うことが大切で
す。

「平和大使として学んだこと」

今私にできること

おおたかの森小学校 6年 氏名 岩本 莉奈



私にとって原子爆弾や戦争は、教科書やテレビの中の出来事であり、どこか自分とは関係のない世界の話だと思。っていたこともあり、今思えば最初はあまり深く考えずに平和大使に応募したことは否めません。

私たちが訪れた平和記念資料館には、「伸一君の三輪車」というものがありました。これは、当時三歳の伸一君が被爆した瞬間まで遊んでいた三輪車であり、天国でも遊べるようにと、お父さんによつて伸一君の亡骸と共に庭に埋められていたものです。これを目にしたときに、他人事だと思。っていた戦争がより現実味のある身近なものに感じ、目をそむけなくなりしました。そして、被爆体験伝承者の方のお話では、一つ一つの出来事とても詳細にお話頂き、よりリアルな原爆の恐ろしさや影響を知ることができました。さらに、平和祈念式典に参列し、平和の尊さについて考える大切さを知ることができました。

私は、平和大使としての経験を通じて、少

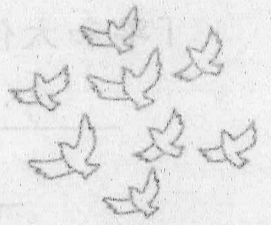
しても多くの人に戦争や原子爆弾の恐ろしさについて知。てもらい「平和」について改めて考えてもらいたいと思いました。戦後八十年を迎え、戦争を知らない世代が majority を占める昨今、その意識が薄ま。っているように感じます。そして、世界ではいまだに紛争や対立が絶えない状況です。平和は当たり前にあるものではなく、平和を強く願う人々の意識や選。択の積み重ねによ。てもたらされるものであり、それが平和を実現させる基盤になっています。

ているのだと思います。そのために、私も戦争の歴史や原爆についてもっと深く知り、平和について考え、伝えていきたいです。とはいえ、今はまだ伝えられる範囲には限りがあります。これからも多くの方々に戦争の恐ろしさや平和の尊さについて伝えていくことにより、戦争がなく、だれもが幸せに暮らせる平和な世界の実現に少しでも貢献していきたいと思います。

「平和大使として学んだこと」

戦争と核兵器のない世界を願って

南流山第二小学校 5年 氏名藤山 杏奈



戦争と核兵器のない世界を願って

私が平和大使を通じて学んだ事は、戦争の恐ろしいと核兵器の怖さです。原爆でたくさん

の人が亡くなった事を知っていました。たが、広

島に行き資料館の展示物を見たり、伝承者の

方の貴重な話を聞いたことで、原子爆弾の

恐ろしさ分かりました。資料館で見た展示

物の中で一番衝撃的だったのは「人影の石」

でした。強烈な熱線によって階段の石は白く

焼けましたが、そこに座っていた人の形が黒く

く残っていた所がとても怖いと感じました。

投下された原爆が爆発すると人や建物を襲

う三つの恐ろしい事が起こります。

一つ目は熱線です。爆発した原爆の真下は

三千度から四千度もの熱になります。爆心地か

ら二、三キロの範囲にいたほとんどの人たちが

の命を奪いました。またその後起こった火

事ではほぼ全ての建物を焼き尽くしました。

二つ目は爆風です。台風や竜巻よりも強い

風に人や建物が一瞬で吹き飛ばされ、多くの

人が建物に押しつぶされて亡くなり、建物の破片が体に突き刺さり大けがをした人もたくさんいました。

三つ目は放射線です。放射線は目に見えず

においもなく、音も聞こえませんが、人体に悪影響を与えます。原爆による大量の放射線

は、人の体の中まで入り込み、皮膚に多くの

ブツブツを生じさせ内臓を傷つけて多くの人

命を奪いました。

資料館では、原爆被害を示す遺品や写真、

絵などがたくさん展示されていました。黒こ

げになって亡くなった人が持っていたお弁当

箱は中身まで黒こげでした。黒こげにな

った子供用の三輪車などもあり、とても衝撃

的でした。

原爆で生き残った人の中には、病気で亡く

なった人たちも多かったです。その中の一人

である佐々木 碩子さんは、放射線の影響で被

爆から九年后に血液の癌である白血病で入

院しました。折り観を千羽折ると願いが叶う

「平和大使として学んだこと」

戦争と核兵器のない世界を願って

南流山第二小学校 5年 氏名 藤山杏奈



という話を聞き、千羽鶴を折り続けました。が
 願いか叶わず十二才で亡くなりました。その
 後、孫子さんをはじめ、原爆で亡くなった多くの
 子供たちをなくさぬために、原爆の子の像
 が建てられました。今では日本だけでなく、
 世界各国からたくさんの方々が訪ねられて
 います。私も平和を願うから流山市の皆さ
 んが折ってくれた折り観を、市民代表として、
 心を込めて捧げました。
 広島に投下された一発の原爆で、七千六百
 人は約十四万人で、後遺症で亡くなった人も
 含めると約十五万人を超えます。東京大空襲で
 数千個の爆弾により亡くなった人が約十万人
 です。一発の原子爆弾で数千個の爆弾以
 上の威力があり、多くの人の命を奪ったこと
 になります。
 今も世界では原子爆弾を含む核兵器の開発が
 続けられ、全世界で約一万四千発あるそう
 です。日本の隣の国には、核兵器を開発して
 いる国はもうすでに持っている国もあるそ

うです。今、世界で核戦争が起こったら、地
 球上の人類を数十回も絶滅させることのでき
 る数だそうなんです。このような恐ろしい兵器を
 持ちたいとは、私は開発したいとは思いません。
 には手、たく理解できません。広島で起こ
 った悲劇は二度と起こらないでほしいです。こ
 の世界から核兵器がなくなったらいいです。
 世界では、今も多くの場所で戦争が行われ、
 多くの命が奪われ、苦しめられている人々
 がたくさんいるそうです。なぜまたに戦争が
 なくならないのでしょうか。広島の方から
 アメリカが投下した原爆で多くの命を奪われ
 苦しめられました。アメリカに仕返しをし
 たい。または同目にあわせてやりたいとは思
 いません。私達のような思いをさせたくないの
 です。という話を聞き、心を打たれました。
 私はこの世界から完全に戦争がなくなり、ど
 んな争いも話し合いで解決できる平和な世界
 になることを願っています。

「平和大使として学んだこと」

平和とは、



流山市立小山小学校 5年 氏名松川 菜々実

私が小学校四年生だった時、国語の授業で「一つの花」という物語を学びました。この物語は、陸軍や特攻隊などではなく、一般市民の視点を書いた物語です。主人公のゆみ子が最初に覚えた言葉は、「一つだけちやうどい」でした。この言葉を最初に聞いた時は、特に何も思いませんでした。これは小さな子どもだからこそ言える言葉なのかもしれないと思いました。なぜなら、当時の大人たちは食料不足、空襲の怖さ、当時の米軍の戦力などを知っているからです。

平和大使として原爆資料館へ行って思った事は、実際に三才の子が家の前で遊んでい爆、その時に乗っていた三輪車が展示されていきました。あらためて考えると、いつもの日常が、何十万人という命と共に爆風でふき飛ばされる、このような事は、私には考えられません。原爆資料館へ行って思った事は、資料館の中でも有名な及川のたれ下がった人々の絵についてです。疑問に思

たのが、何故絵でしか記録に残っておらず、写真が残っていないのかという事です。資料館の公式サイトを見てみると、「目を開けて、目を開けて」と子どもの名前を呼び続ける半狂乱の母親の写真をとった菊池俊吉さんは、二十分ほどためらったのちに「まい目のシ」ターを切った、と言います。この事から、私は皮膚のたれ下がった人の写真は、言葉ではあらわせないくらい、おぞましかったからとれなかったのだと思いました。

今回、平和大使として原爆のことを学ぶに行くと、考えました。何故戦争はおきるのかです。私の考えは、立場がちがうからなので、は？と思いました。立場がちがうから争って、取めて憎み合ってしまふ。けれども、それそのの立場を差し引いて考えたら、本当は皆、戦争なんてしなくてもいいのかもしれない。この考えをもっと色々な人に広めていきたい。そう思えた体験でした。

「平和大使として学んだこと」

平和のバトンをつなぐ

新川

小学校 6 年

氏名 合田 梨乃



広島で原爆について多くのことを学びました。

私が一番心に残ったのは、つぎの日常が一時にして奪われた」ということです。

今から八十年前八月六日広島朝はいつもと同じように始まりました。朝ご飯を食べ学校や仕事に向か、た人たちがいました。しかし、午前八時十五分一発の原子爆弾が投下され、強い光と熱、爆風で町を焼きつくしたそうです。建物は倒れ火の海となり、多くの命が一瞬で失われました。

平和記念公園につくと、そこは緑豊かで川の流れる静かな場所でした。でも、その地下には、原爆で亡くなった多くの人が眠っていると聞いて胸がしめ付けられました。資料館に入ると、被爆の悲惨さを伝える写真や遺品が並んでいました。真黒に焼け焦げた、三輪車、お弁当箱。それは当時の当たり前の日常がなくなり、亡くなった人達の命の重さを語っているように感じました。

本や資料を事前に読んでから行きましたが実際に目にした写真や遺品は想像よりも生々しくて重い現実を教えられました。私は「悲しい」「怖い」という気持ちが強くなり心が苦しくなりました。

被爆伝承者の方のお話や記念資料館などを見て、戦争が終わっても人々の苦しみは長く続いたということが分かりました。家や家族を失い病氣や怪我に苦しみながらの生活や、水、食べ物、住む場所もなく不安な日々が続いたそうです。そして被爆したことで「近くにいと病氣がうつる」といううわさから、仕事や結婚を断られる被爆差別にも苦しめられました。このことから、戦争が終わればすぐに日常が戻り皆が幸せになるわけではない事を私は初めて知りました。

流山市長のお話に「戦争を始めることは簡単だが、終わらせることは簡単ではない」とありました。その言葉はとても重く心に残りました。そして戦争は過去の出来事ではなく

「平和大使として学んだこと」

平和のバトンをつなぐ

新川

小学校 6 年 氏名 合田 梨乃



今も世界のどこかで行われています。

ニュースでは爆発や空襲で家を無くして泣いている子供の姿が映ります。場所や国が違っても、苦しみや悲しみは広島で起こった出来事と繋がっていると思いました。戦争は消して遠い国の話ではなく、私たちとも無関係ではないことだと思いました。

平和は当たり前前にあるように見えて簡単にくずれてしまう事がわかりました。だから原爆の悲しみや、戦争の恐ろしさを周囲に伝え続けることが大切だと感じました。私たちは過去から学び、同じ過ちを繰り返さないようにしないといけません。私は広島で学んだことを家族や友達に話し、平和の大切さを伝えていきたいです。そして平和のバトンをしつかりと受け取り、多くの人へと繋いでいきたいと思いました。

「平和大使として学んだこと」

核兵器をもう二度と使用してはならない

長山崎 小学校 六年 氏名 秋山 賢太



ぼくが平和大使を通じて学んだこと。それは、核兵器をもう二度と使用してはならない。ということだ。

理由は五つある。一つ目は、現在と何も変わらない子供達が、原爆によって普段通りの生活を一時にして奮われてしまったのが衝撃的だ。だからだ。想像するだけで体が震えた。

二つ目は、原爆や戦争のせいで勉強したいのにできなかった。たり、遊びたいのに遊べなかったりして、いる子供達を思うと非常に悲しくな。たからだ。三つ目は、原爆一つで、被爆者が後遺症による偏見にさらされた。それにより、「後遺症が移る」と結婚を断られ、被爆者がまともに生きることができなくなった。たことが、信じられなくて怒りを覚えたからだ。四つ目は、強い熱線により垂れ下がる肌や、まばたきをする間に目の前が火の海になる光景を想像した。その時、一瞬にして奮われていく家族や友達を見ると涙が出そうになっ。て、

「原爆がこの世にあるだけで悲しい。」と思。たからだ。五つ目は、当時のとても幼い子供が、

「原爆なんて大嫌い、アメリカなんて大嫌い。」と言。っていたのに、今は核抑止力を使。っている国がいることがとても残念に思。たからだ。

核兵器がもう二度と使われないためにどうするか。ぼくは、スポーツをみんなと楽し。みスポーツを通じて平和の取り組みを広げてみようと思。う。なぜなら、平和祈念式典で広島市市長が、

「出来る事ならスポーツでも音楽でも何でも良い、『平和文化』を広げて行きましよう。」と言。っていて、自分の得意なスポーツとコミ。ュニケーションで「平和とは何か」を伝えて行けると思。たからだ。スポーツをすると他者を思。う気持ちが生まれる。また、他者を思。う気持ちは、平和への第一歩だからだ。

ぼくは、原爆をもう二度とくり返さないた。めに、スポーツを通じて平和文化を広げてい

「平和大使として学んだこと」

核兵器をもう二度と使用してはならない

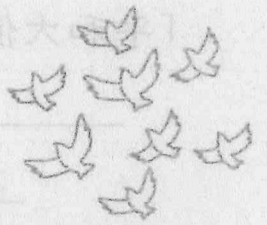
長崎 小学校 六年 氏名 秋山 賢太



こうと思う。

「平和大使として学んだこと」 戦争の悲惨と今の現状

おおくろの森 小学校 5 年 氏名 香川 空良



広島へ行く前から、戦争はしてはいけないし、核兵器を保有することもないことは知っているつもりだった。しかし、広島に行ったことで改めて、戦争の悲惨さや核兵器の恐ろしさを感じた。

被爆者体験伝承者のお話では、十四歳の時に被爆した山本定男さんの思いや、実話を伝承者の高橋哲男さんが話してくださった。爆心地から約二・五キロの東郷兵場で、芋畑の草取りの作業前、集合していた時に被爆した

山本さんは、熱線により首に火傷を負い、爆風で飛ばされた。数日後、親戚の安否を確認するため、広島市の中心の本通りに自ら入った時に、本通りの商店街の店はくすれ落ち、未だ、火がさかんに燃えてしゃがんだ人がドクドクになっているのを見てしまったそうだった。ぼくは、その様子が描かれた絵を二日目に見ることができたが、その絵はあまりにも恐ろしく戦争の悲惨さを物語っていた。平和記念資料館では、焼けて黒くなったレンガ、ガラス

片が突き刺さった壁、人影が残った階段、相生橋上で燃える路面電車、溶けた仏像、金属などの溶融塊、ガラスが溶けた置き時計などの原爆の恐ろしさを伝えるものがたくさんあった。特に焼けた三輪車、三人の学生が着ていた衣服などを見ているとそれを使っていた人や着ていた人などの思いが頭にうかんできた。原爆が落ちなければこのようなことにならなかったのに、と思えば、悲しくてカメラで写真も撮ることがしはらくてできなかった。また、

その後見た原爆ドームでは、ドーム部分が鉄骨のみになっていたり、窓ガラスがなくなっている。原爆の威力を身をもって実感した。

二日目、平和記念式典参列では、八時十五分、原爆が広島に落とされた時間に、鐘と一瞬と一瞬の合図とともに、目を閉じると、原爆が落ちた時の人々が苦しむ様子、皮ふがたれさがっている人などが頭にうかび、恐ろしくて悲しくて、思わず泣きそうになってしまった。その後、こども代表の佐々木さん、関口



おおぐろの森小学校 5年 氏名香川空良

さんの話で心に残ったのは、
「OH! VOICE」

「たとえ一つの声でも、学んだ事実を思いを
込めて伝えれば、変化をもたらすことがで
きるはずですよ」

という言葉だ。一人でも変化をもたらすこと
はできる。だから、まずはよく自身が核兵器
と戦争の恐しさを周りに伝えていきたい。
現在ロシアのウクライナ侵攻、ガザ・イス
ラエル紛争など、まだ世界では戦争が起きて

いる。しかし、いつかは、世界中に平和がお
とずれるようになってほしい。戦争がなくな
り無駄な犠牲がなくなる世界になってほしい
と強く願いながら、自分に出来ることをこれ
からも考え続けていきたい。これが、平和大
使に任命されたぼくの使命だと信じて…。

「平和大使として学んだこと」

戦争と原爆のおそろしさ

長崎 小学校 5年 氏名石山 典燈



僕は、思いました。原爆とは、「残酷」なものだと。なぜならたくさんの人を殺し、そのあとも苦しめ続けたからです。僕は、宗田理さんの『ぼくが見た太平洋戦争』を読み、戦争で苦しい状況の中、落ちてきた原爆が大きな被害をもたらしたことを知り、さらに深く知りたいと思いました。

僕は、原子爆弾と初めて聞いたとき、なんとなく普通の爆弾より火薬の量が百〜五百倍の爆弾だと考えました。しかし、広島に行き、

被爆者の方のお話を聞いて、原爆はそんな生ぬるいものではないとわかりました。特に原爆の落ちた翌日には、ほとんどの物が焼け、吹き飛んだという話が印象に残っています。

一発で県一つを「もう復興できない」と思わせるくらい破壊力が強く、十数万人の人を殺し、苦しめたことを知りました。放射線による癌や、白血病で亡くなった人も少なくなかったそうで、今でも後遺症に悩まされている人がいるそうです。落ちた瞬間だけではなく、

後々まで被害が続く怖さもあると思いました。また、被爆したことを理由に結婚を拒否され、亡くなった人もいたそうです。僕は、「被爆したということだけで、差別するのはひどい」と思いました。資料館では、原爆が落ち、焼け続けている街の様子を描いた絵や展示を見て、炎の恐ろしさを感じました。亡くなった人たちの遺品を見て思いました。「これ以外の方が燃え尽きるなんて……僕が、あのような状況にいたら、何にもできなかったかも

しれません。広島の人々はそれでもあきらめなかつたから、今の広島があるのだと思います。

平和大使を通して、「平和」とはどんなものか考えました。それは、争いがなくみんなが穏やかに暮らせることです。そのためには、みんなが譲り合い、助け合うことが必要だと思います。僕は、ポスター活動や学級新聞で戦争や原爆の恐ろしさや、平和の大切さを伝えていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

原爆のない世界を願って

流山市立小山 小学校 5 年 氏名妹尾 寿生



私が「平和大使」になった理由は、平和や戦争について深く考えたことがなかった。この経験を通してよく考えてみようと思っ

たからです。
一日目八月五日、最初にカンフー・リンゼンターに行き、被爆体験伝承者の高橋さんからお話を聞きました。原爆が投下される前の町はとてもにぎやかだったと言っていました。しかし原爆が投下された後、広範囲に被害がおよび町などが一瞬で焼けこげ、以前の姿が

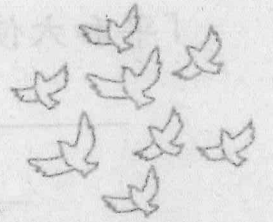
分からなくなりました。沢山の建物がこわれ果ててしまっただのことです。私は原爆の破壊力、恐ろしさ改めて感じ、自分かその場にいたらと思うとぞっとし鳥肌が立ちました。そして話が終わった後、原爆の子の像を見て、千羽鶴の献納もしました。他にも沢山の人が集まり、手を合わせお祈りし、献納していました。多くの千羽鶴を見て、こんなに多くの人が平和を願っているのだと感じました。そこから近くにある原爆ドームを見に行きました。そのま

に大きな衝撃を受けました。そして平和記念資料館に行き、当時の写真や映像を見ました。どれを見ても残さずで悲しい気持ちになりました。そして二日目八月六日、最初に平和記念式典に参加しました。そこで私が一番心に残したのは、子供代表の関口さんと佐々木さんのお話でした。子供とは思えないほど、平和を願っている気持ちで強く感じられました。そして黙祷をし終った後も長く手を合わせている人が数多くいました。ささいとなった人々に

届けばいいなと思いました。平和記念式典が終った後、広島国際会議場の展示物の見学もしました。そこには沢山の悲しみな絵などが展示されていていました。そこに投下直後の絵が展示されていてとても恐ろしく感じました。今回の平和大使を終えて、私は思いました。原爆とは世にあってはならないものだ。この経験を生かして私ができる小さなことから取り組み、平和が続く世の中におおはいいなと思いました。

「平和大使として学んだこと」

平和の世界を願って



西初石 小学校 5 年 氏名 丹澤雪乃

「原爆の子の像」に流山市民からお預かりした千羽鶴を捧げた八月五日。平和大使として初めて訪れた広島は、おどろかした太陽に照りつけていました。翌日参列した平和式典には、世界各国から約五万五千人もの参列者が、原爆で亡くなった尊い命に祈りを捧げました。式典の終りに斉唱された「広島平和の歌」は、今でも私の耳に残り、時々口ずさんでいます。

一発の原子爆弾がもたらした悲劇。多くの

命が奪われ、一瞬にして当たり前の日常が消えていった広島。実際に訪れてみると戦争が遠い海の向こうの出来事ではないことに恐ろしさを感じました。戦争さえなかったら、七くならずにすんだ命はこの世界にどれほどあるのでしょうか。必要のない争い、止められない争い。

戦後十一年を向かえ、戦争で起きた事実を語り継ぐようと、様々な立場の人達が活動していることを、広島への旅を終えてから見聞さ

する機会が増えました。特に印象的だったのは、テレビで90歳をこえた方たちが、本当は辛くて、思い出したくない記憶も必死に話し切ったことです。私はその方々の体験を聞こうとし、見ようとし、感じようとしなければなりません。そしてそれを語りついでいく使命があります。

この広島への旅を終えて、自分にできることとは何なのかとうとう、初めはとても難しく考え、答えが出ない気がしていました。

あるテレビの歌番組の司会者が「たけさなことはなく自分の好きなことを通して、世の中が平和になっただけがいい。」と言っていました。歌を聴いて感動すること、皆で歌を口ずさむことも、平和への想いを共有する一つの手段になるのだと知り、難しく考えなくて良いのだと気が楽になりました。

流山市平和大使として、戦後80年を多くの日本人と共に迎え、自分にできることは難しいことではなく、日常の中のささいなことでは

「平和大使として学んだこと」



西初石小学校 5 年 氏名 丹澤雪乃

いっだときかいた気がします。身近な人との
関わりの中でまず相手を知らうとすること、
相手の思いを聴こうとすること、相手を尊重
気持ちで常に持つこと。小さな日常での関わり
合ひでも、世の中は良い方にも悪い方にも
傾いていくということを常に胸に刻み、生
しょうし思います。

「平和大使として学んだこと」

がいついきよとてもおそろしい

おあたかの森 小学校 5年 氏名 ちあやう



「原爆はともおそろしい」これがぼくのリアルな感覚だ。3メートル4トンの爆弾で約7万8千人が即死し、1年以内に約14万人が火傷や出血で死んでいる。その後も放射能の後遺症や、バが傷ついてとくな。た人もたくさんいたという。

平和記念資料館で原爆が投下された時のシミュレーション映像を見た。広島が一瞬で焼けてボロボロの黒焦げになり、人も車も消え去った。・・・ように見えたが実際は人が

なくなくなったわけではなく、とけて垂れ下がった皮膚かく、つかない上うに手を前にのびし水を求めて歩く人、爆風で全身にかウスが刺さった人、が水ぎに押しついていた人がいた。

広島に行く前に映画「火垂るの墓」を見た。

清太は戦争が進むにつれて、物を盗むようになっ

て人が変わって行く。でも命がけだった。

し、節子には常にやさしくて、節子を守るため

には仕方なかったんだと思う。原爆が落ちて

くる前の広島は、子供たちが楽しそうに遊ぶ、ぼくたちの住む流石と目じょうな町だった。なのに、それが一瞬で消え去ってしまふなんて最悪すぎる。

この平和大使派遣は母が申し込んでいて、最所は正直行きたくなかった。でも行ってみて本当は良かったし、ぼくの人生にとって貴重な経験になった。写真に撮るのも幸くなるような資料や、もう一度見に行く気にはなれないような現実を知った。

被爆体験伝承者の方が、広島この悲惨な現実を多くの人に知ってほしい。若い人たちが重く受け止めて被爆者のない平和な世界を実現させてほしいと言っていた。ぼくはもと戦争や原爆について調べ知識をつけ、広島のリアルを知らない人に伝えていかねばならない。友達がいなくなっている時には、小さな争いが戦争のき、かけになることを教えてあげたい。そして今のぼくにできる一番大事な事は自分の命を大切にすることだ。

「平和大使として学んだこと」

広島に行、て平和について考えたこと

流山 小学校 6年 氏名 遠藤 悠真



「カーン」平和の鐘が鳴った。
八十年前の八月六日、午前八時十六分に、
た、た一発の原爆により、多くの命が
亡くなり、生きのびた人も、後遺症に
苦められた。この平和の鐘の音は去年テレビ
からじか聞こえた。た、しかし、今年も、
自分の目で、直に聞くことができた。平和大
子として、ぼくは行く前、原爆を、とても
恐しい兵器く、い、思、て、いた。たが、
平和記念資料館に行き、自分の考えが
あまたなことに変わった。
爆発の衝撃 七くな、た人、父、で、焼け
七くな、た子供、放射線を浴び、ケロイトや
白血病の後遺症など七くな、て、いた。た人、
他に、ち、とりた人のあと、田が、た、り、
高温により、ついた鉄柵やお茶碗など、
行、た後の今、ぼくが原爆に対して思うこと
は、言葉で、い、表、せ、ないほど恐しく、とても
非人道的であり、人の体も心も殺してしまう、
この世に存在してはならない兵器だと思、た。

次に被爆者二世の高橋哲夫さんが語、て
くれた、山本さきおさんの被爆体験を聞いた
か、それは、ぼくの想像のほるが上、た、た。
当時小学二年生で朝から草取りをしていた
山本さんは、自分から見て右の方角から
飛行機が二機飛んできて、一機別の方向に
行くのを見た時、首が熱くな、た次の瞬間に
衝撃波でがなり飛はされ、目を閉、けると、
あたりは、とても静か、た、た、え、う、た。
家族が心配で家に向かう途中、死体をか、なり
見た、え、う、で、その場、か、い、て、ら、う、と
思、う、と、とても怖くな、た。
改めて、平和記念資料館の写真を、
山本さんの被爆体験なども聞き、
戦争をしないため、どうする、か、と
「平和はどのようにつくられる、か」を前より、
ますます深く考え、て、いた。まず「戦争をしない
ために、したが、個人が戦争をしないために
何かをしても、戦争をするのは国なので、
状況は何も変わらない。た、れ、ど、大勢の人が

「平和大使として学んだこと」

広島に行き、平和について考えたこと

流山 小学校 6年 氏名遠藤悠真



何かすれば、ぼくは戦争をしないようにする
ことが可能だと思う。

そして最後に、平和はどのようにすれば
つくれるか。だが、みんなが平和であり続け
るためにどうするが、世界で戦争が起きて
いて、いざというときを、自分のこととして
考え、興味や関心を持ち、それらの事に
ついて学び、聞き、それで自分の考えを
広め、他の人と考える。というサイクルを
回せば、さ。と平和になると思う。

ぼくは、このサイクルを回し、友達に広め
たりするように努力するつもりだ。
さ。とぼくができる平和大使としての役目
なのだろうか。

「平和大使として学んだこと」

広島に、と思ったこと

魚ヶ崎

小学校

5年

氏名別府けいすけ



平和大使を終えた今、私が思っていることは、
八十年前に起きた原爆投下について、
被爆体験伝承者の高橋和男さんの話しはとて
も悲しい内容だった。
それは原爆が落とされる前までの普通の日常
がアメリカの爆撃機が落とされた一瞬の原爆に
より普通の日常が一瞬にしてなくなっ
た。もし私があの場に居たら、パニックにな
って何もできずに逃げ遅れていたらと思う。見
学した資料館には私と同じ位の年の子のおお
当分が展示されていたら、きっと遅れて、
爆風により体は跡形もなくなっていたと思う
ぞうした。私は、原爆とはもう二度と交わり
ては行かない物だと思ってる。今の平和な日本
で暮らす私の生活はあたり前だと思ってる。た
けど広島に行くと、八十年の日本で実際に起
きたことは今も世界の戦争をしていく中で戦
争を知りなり私の目に映った広島の写真はと
ても直視できないうるものだった。資料館の
展示が最も訴えたりすることは、もう二度と戦争を

起こしては行かないということだと感じた。
私が平和大使として広島で見聞した体験
を出来るだけ沢山の人の手には伝えたいかな
らうと思う。日本が平和であり続けるために
はみんなが平和を願って、武器や兵器持たずに
争いをしないことが大切だと思った。
私は平和大使を終えた今思うことは、原爆
により悲しい過去がある日本と同じく、世界
でも二度と起きないようにしようことだ。
今日の経験は、私にとって大切なもの
だった。この経験を生かして、命を大事にし
たい。

「平和大使として学んだこと」

広島原爆

南流山第二 小学校 5年 氏名 小林 俊貴



私は、平和資料館にあった多くの死体などの絵を見て、二度とこのようなことをしてはなさいと考えました。

平和大使としていく前といった後で自分がわかったことは、さいしとは広島に原子爆弾がおとされ多くの被害がでた事をまず知りました。でもその後、実際に平和資料館に行くと自分か思った以上に原子爆弾の被害がおそろしいこと、はげしい爆発を知ることでも怖く思いました。

広島では、80年前の8月6日8時15分までくらししていた多くの人々たちが亡くなりましたそれはたまたひとつの原子爆弾のせいであら約4万人の人たちが一瞬にして亡くなったのです。

今の広島は、原爆から80年と長い時間かたち平和にくらしてゐる事は分かります。けれどももう二度と80年前におちこきた原子爆弾の悪夢をおこさないようにする必要を感じました。そのためには、すべての国が戦争のない平和な国づくりをする必要があると思

います。でもそんなすぐにすべての国が平和になるわけではありませぬ。まだまだ戦争をしてゐる国があり長くざんこくなもので多くの死者が出てしまします。でも自分のいる国から少しずつ平和をつくらなければならぬ。もしれないと考えられれます。そのために自分の知り合をつくり原子爆弾などの危険物を知り、なるべくなくしていく必要があると思います。少しづつ行つていけば、平和を作つていけるし私は、考えています。

自分が少しづつでも本を読んだり勉強したりして未来へとつなげていく必要があると私は、考えています。

「平和大使として学んだこと」

平和のために、私ができること

鯖ヶ崎小学校 6年 氏名 林 恭子



「平和大使」を終えた今、私が思うことは二つある。

一つ目は、原爆や戦争は、絶対にあつてはならない、ということだ。平和記念資料館に訪れて、一番最初に何かをうったえたのは、血まみれの少女だつた。怖い、とぞ、直に思った。次は、広島で被爆した数々の物たちを見た。熱線により曲がつてしまつた自走車や茶わん、ボロボロにされた衣服など、そこにあつたものの全てが恐ろしく、途中から直視することができなかつた。しかし、これは全て現実で起つたことだ。人々は原爆投下後も放射線などのえいさうを受けて原爆症などに苦しんだ。それなのに以前アメリカの大統領が原爆を正当化しているということを知り、スで聞いて、悲しくなつた。八十年前の一大一発の原子爆弾で、今でも苦しんでいる人がいるのに。私は資料館を訪れる前よりも、戦争や原爆があつてはならないとより強く、心の底から思つた。

二つ目は、戦争を知らない世代にこの原爆や戦争について伝え続けていかななくてはならないということだ。きせき的に生き残つた被爆者の中には、思い出さなくともあの日のことを多くの人に伝えていける人がいる。「まさに地ごくを見ていようだつた。」と表現するほどの経験をしているのに、勇気を出して声に出し、そして伝えよう者の方につきぎ、今まで伝え続けられていける。私は伝えよう者の話を聞き、「今回見聞きしたことを見んなに伝えていかなければ。」と使命のようなものを感じた。

今回、広島にはけんざれて、戦争と原爆があつてはならないと思つたのと同時に、私の役目についても考えた。世界中で戦争や紛争が起きている今、私にできる事は、戦争の悲さんさや平和のとうとさ、そして戦時中の人々の想いを伝えていくことだと思つている。

「平和大使として学んだこと」
平和をつなぐ世界

おおぐろの森 小学校 6年 氏名 小林海翔

原子爆弾、それはたゞ一発で人々の心と
体を大きく変えてしまうものでした。

平和記念資料館の展示を見た時、ぼくの心
をどよめかせた写真の展示がありました。目
の前に無数に広がる骨がい骨。後に、焼かれ
ずに埋められた遺骨で、この人達はまともな
治り方うを受けられず、亡くなられたのだと
分かりました。しかし、そのときは、必死に
カメラのシャッターを切るので精一杯でした。
けがなどをして、病院にすら行かれないな

んて、今考えたらありえないけれど、それほ
ど人手や薬が足りず、たくさんの方が苦しい
生活をしていただのだと思いました。

カンファレンスセンターでは、伝承者の高
橋さんから、当時中学二年生だった山本さん
の話を聞きました。当時山本さんがいた、東
練兵場という全焼区域からはなれた場所であ
っても、強烈な爆風と熱線により、体が草原
にふき飛ばされ、首の側面にやけどを負った
そうです。原爆による損害は、建物かふき飛

ばされた爆心地から近い区域だけでなく、爆
心地から遠い場所でも、たくさんの方が被害があ
った、ということを実感しました。

原子爆弾は強烈な勢いで爆発し、多くの
人を即死させましたが、原子爆弾を落とすとい
うことは、爆発するだけでなく、被爆地
に残された放射能による白血病なども多く
の人々が亡くなった。ということを知りました。
このような核兵器を、この世から消し去り、
戦争がない世界をつくるには、お互いが分

かり合える、ということが大事だと思いまし
た。そのために、ぼくたち平和大使が、平和
学習で学んだことを多くの人に発信し、つな
いでいくことで、戦争がない、誰もが体も心
も、無駄に傷つかない、平和をつなぐ世界
をつくれるように、努力し続けていこうと
思います。

「平和大使として学んだこと」

そこに私がいたら

流山市立長崎小学校 6年 氏名上村安寿でん



一九四五年八月六日、私が広島にいたら、みんなに「あれは、原爆だ。早くにげて！」と言っていたと思います。そうしたら、被爆者を少しでも減らすことができていたでしょう。けれど、世界で初めて落とされたあの日の原子爆弾は、誰にもその結果を予想できなかったでした。

資料館で見た、その日に人々が身につけていた私物や服の残った様子が、私に原爆の結果を語っているように感じた。その服を着ていた人が原爆によってどんな被害を受けたか、バガ苦しくなるほど感じ取れました。

被爆証言者の話では、B29が広島の上空を飛んだ時、何もせずじりたーんとしたもどったのを見て、「変だなあ。」と思ったと同時に首元が熱くなり、強風で飛ばされたそうです。いっしょに気絶して、気が付いたときには、広島街の上に大きい火の玉がういていたと語ってくれました。その火の玉は、ぐんぐんふくらんでいて、その人は、山の方に、に

げたそうです。家族を探しに広島街にもどった。たくさんの死がい丸焦げにな。転がっていたし悲さんな体験談をしてくれました。

もうそのような被害が二度と起こらないように日本では、非核三原則ができ、「核兵器を持ちこまない。造らない。使わない。」という約束ができました。それなのに、世界では、戦争は、と続いていて、私と同じ年の子や何の罪もない家族が被害者となりたくさんの命が失われ続けています。もしその場に私がいて友達や家族を失ってしまったら悲しみ、のあまりどうすればいいか想像もできません。少しでも身の回りからそのような争いがないようになるように、私は、学校でケンカがあらば、自分の気持ちを伝える勇気を持って、暴力・暴言に反対します。小さな取り組みが世界平和につながることを願っています。

私の使命

鯨ヶ崎 小学校 6年 氏名石尾 心夏



私は平和大使になって、核兵器の残酷さを学びました。広島平和記念資料館に入った瞬間重苦しい空気に封じこめられました。八十年前は私の知らない時代でしたが伝承者の話を聞いたとき資料館を見て学んでいるうちにしゅげきをうけました。焼けたたれてはがれ落ちる皮膚、大きな火傷、細胞を傷つけ、爆風で飛ばされた事による外傷などが、実際に起きたなんて信じられません。資料館の絵を見て震えが止まらなくなりました。世界で

初めて日本で実際に起きた事なのです。大切な家族を亡くしてとても辛いことでしょう。しかも被爆者は生き延びることができたとしても肉体的、精神的苦痛や偏見や差別など、不幸せとは限らないという事が分かりました。なぜこんな悲惨な出来事が起こるのでしよう？また世界には戦争をしている国もあります。私はなぜ戦争が起きるのか調べました。民族間の対立、宗教の違い、資源の奪い合い、領土問題、政治的な事などがあるそうです。よ

うするに自分と違う人間を受け入れたくない、そして自分さえ良ければ人なんてどうでもいいという考えではないでしょうか。私は親の転勤のため4校目の小学校に通っています。転校生に対して全ての人が快く受け入れてくれるわけはありません。でもきっとその人たちも環境が変わってしまふのが不安なのだと思います。私はみんなと会話をして理解し合えるように努力をしています。お互いを理解し合う事が出来れば仲良くなれるはずです。

それには相手を思いやる気持ちで会話をすることが大切です。世界もきっと話し合う機会があれば戦争をする事も核兵器を使う事も他人を不幸にしなくてもいいはずです。核兵器では絶対に誰も幸せになりません。私も自分に力にみんなに伝えていきたいです。戦争はすぐに始めることができる、だがそう簡単に終わらせられない。争いをなくすために私は相手に思いやりの気持ちを持つ事と話し合いをすることで周りに伝え核兵器のない平和な

「平和大使として学んだこと」

私の使命

鯖々崎

小学校

6年

氏名 石尾 心夏



世界をフクッていきたいです。

・「平和大使として学んだこと」

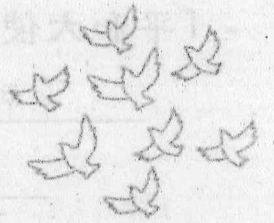
・平和につながる第一歩



市野谷 小学校 五年 氏名 溝端 悠天

僕が今回の体験で学んだ事は、戦争は簡単
に始められるが終わらせる事は難しいという
事だ。80年経った今でも痛みや苦しみ悲しみ
は残る事なく続いている。戦争はただのゲ
ンカではない。人が焼きただ木、大切な家族
も家も皆んな焼いてしまうのだ。
今でも世界のどこかで戦争が続いているけ
れど戦争って本当に意味がわからない。
戦争をする事で何が生み出されるのか、失う
事の方が多いのではないだろうか、今のホリに
は答えが見つからないままだ。
資料館には遺品や残骸が展示されていて胸
が苦しかった。伸一ちゃんの手で溶けて曲が
った三輪車、もっと三輪車乗ってた。ただろ
う心の僕も三輪車大好きだった事を思い出し
てとても悲しかった。こんな戦争は絶対に終
り返してはいけないうし決して忘れては行か
ないのだ。僕は寝坊をしても朝ご飯を食べられ
ず水道水だって飲み放題だ。お母さんがいて前
ちんもいる。正直学校に行きたくない日

あるけれど楽しい事も沢山あるし給食だって
毎日お腹一杯に食べられる。僕は魚釣りも大
好きだ。そんな当たり前な日常が一瞬で消え
てしまったらと思うととても恐ろしい。
僕達の生活の中にも小さな戦争はある。お互
い良かれと思って言ったり言葉や行動がケンカ
になっちゃってしまったりする。そんな時は皆んな
が仲良くなれる様に考えていきたい。それが
平和につながる第一歩だと思うから。
戦争伝承者から未来はあなた達が作る。とい
う言葉が心に残った。争いは誰が幸せにしな
いと教えてくれました。
平和は願うだけではなく皆んなが平和である
様に行動していく事が大切だと学びました。
だから僕は平和大使で学んだ事、感じた事、
体験した事をこれから伝えていきたいです。



八十年前の八月六日、こんな非劇が現実
に起きていたなんて、それはたぶんとも変わ
らない普通の生活をしていた時、突然起こ
ったことでした。僕は原爆について知ってい
るつもりだったけど、ここに来てからは、僕
の想像を絶する絵や写真があった。
もしも僕がああヒロシマにいたら、きっと苦
しみ、死ぬことだってあり得ることだと思
う。資料館の中には、僕と同じ年の子が持っ
ていた物が展示されていました。だがそれも原
爆の爆風などでボロボロだった。より原爆の
恐ろしさ伝わってきた。
そこで僕は思いました。原爆とは「地獄」と
あの口付だ。僕の毎日は起きて学校に行き
ご飯を食べて寝る、それが当たり前だと思っ
ていた。しかしそれは、当時のヒロシマには
ありませんでした。当時には水をくれず、と
言っただんどん死んでいく人がいた。今の自
分と比べると地獄のようだった。
広島について私が知っていたこと、これはた

だの想像でしかなかった。けれども来てみて
自分の想像をはるかに超えていた。
原爆後の広島、それは生きよつと思っ、でも生
きられない世界、人間が人間として当たり
前の生きることが出来ない世界。
戦争は遠い昔、遠いところて起ったこと、
なつ思っただけで、戦争はすぐ身近な場所
で起こつていた。たとえ何年かたって、も
広島に原爆を落としたことは忘れられない。
原爆を受けた広島の人々を通して私たちは何を
考えればよいのだろうか。この非劇を二度と
繰り返してはいけない。だから自分の身の周
りにあることを少しづつやってみる。なつ自
分は考えます。戦争をするのも被害を受けるの
も人間、どうして人は争いをするのだろうか。
この地球の中で生きていく限り、人を殺すこ
とをとても残酷なものなのに、戦争になると
争いだから本当はしたくないがするしかない
としが考えられなくなつてしまふ。戦争はた
った少しのことから始まる。今回の原爆を落

「平和大使として学んだこと」

80年前のヒロシマ

流山 小学校 6 年 氏名 川村 奏介



とすまでは日本軍がハワイの真珠湾を奇襲攻撃したのがきっかけです。ですが日本も相手の領土に勝手に入り、攻撃したのも悪いですが真珠湾への攻撃には原爆のようなことはな

いと思うが僕は相手の領土に入り攻撃するだけで原爆を落とされるまでに発展してしま

うなんて改めて恐ろしいと感じます。

被爆体験伝承者の方の体験談を一番心に残ったお話は、たった一瞬で地球が分裂していつか何万人もの人々が溶けるようになってしま

った。そして防空壕に入っていた人も居なくな

り炎が広がっていつか生き残っている人は当時の

広島市の三分の一の割合の人が死者・行方不明者

ということを言われ、悲しみより怒りの

方が先に出てくるほどの感情でした。

被爆死した人たちが私達に伝えたいこと、ま

ったそれは二度このような非劇を繰り返さな

いてほしいということをお願いしたいと思う。

平和大使を終えた今、私が強く思っているのは、戦争をしていても勝っても負けても人間を殺し

たというのに変わりはなく、何も良いことはないということだ。今回の経験は、私にとっ

ことても貴重で僕の考えを大きく変える体験

なものだった。この経験を原爆の恐ろしさを

日本人として知っておくべきなのなので、

しっかりと伝えたいと思います。

「平和大使として学んだこと」

想像を絶する原爆のおそろしさ

流山 小学校 5 年 氏名 福地 真治



真夏の日差しが照りつけるなか、ぼくは平和大使として広島へ行きました。そこで、平和記念資料館へ行きました。そこには想像を絶する絵や写真の展示がありました。ひふはたれさがり、「水をください」とうめく人々、変色して、風せんのようにふくらんだ死体、その他にもむねをえぐられるような写真がありました。ぼくは、それまで原爆はふつうの爆弾よりも少し威力が大きいものだと思っていました。ですが、巨大なきのこ雲の写真を見るとその想像をはるかに上回るほどおそろしかったです。

被爆体験伝承者の高橋さんの話では、原爆投下前の広島は今と変わらず、遊んでくらしていたそうです。ですが、戦争が終わりに近づいたころには、女も子どもも全員戦争のため訓練をさせられていました。そして、原爆が投下される前には、何万発もの爆弾の一種の焼夷弾が落とされました。なので、広島は炎に包まれてしまいました。また、被爆者

である伝承者の父親は、中学生が訓練をする練兵場で、仲間と集合していたときに被爆しました。最初はドーンと爆発がおきてふきとばされ、広島駅のほうを見ると赤くて巨大なきのこ雲を見たそうです。そのあと、同級生と尾長天満宮へにげた後は、爆弾は落とされず、しーんとしていたそうです。

ぼくはそこでその画像を見たときに、もし原爆が現代の東京に落ちていたらどんなにおそろしいことになっていたのだろうと思います。

ぼくは、伝承者の話を聞いて、戦争は絶対にやってはいけない、やったら人が大勢亡くなるおそろしいものだとして改めて実感させられました。なので、これから戦争についてもよく知り、周りの人達にも戦争や原爆のおそろしさなどを伝えられるような人になりたいです。

「平和大使として学んだこと」

平和をつなぐ

南流山第二小学校 5年 氏名 本村 亜衣子



被爆体験伝承者の方の体験談で一番衝撃的
だったことは、私と同じくらいの年の子が、
疎開で家族と離れて暮らしていたことです。
私は五人家族で、年の近い妹と年の離れた弟
がいます。もし私が戦争の時代に生きていた
ら、私と妹は疎開に行き、弟と両親は家に残
ることにし、家族バラバラになっ、てしま
います。そのことを想像するだけで悲しくな
てしまいます。

実際に疎開をしていた子たちはどんなに悲
しくつらかったことでしょう。疎開から帰
ってきた子供たちの中には原爆で両親を亡くし
た子も多かったそうです。これを私が経験し
ていたら乗り越えられる自信がありません。
広島を訪れる前に見たテレビ番組で、
一人のアメリカ人が助かるなら百万人の日
本人が死んでも関係ない、
こっちはたしのゲンだ、と読んだあるアメリカ人
読者のお父さんの発言がありました。それを
聞いた私は悲しくなりました。でもき、て日

本人にも同じような考え方がたくさんい
たことでしょう。

このような悲しいことを考える人をたくさ
ん生み出してしまったのが戦争です。戦争を
防ぐためには、国や文化が違、てもたくさん
話し合、て相手を知ること、そして困、てい
る人に手を差し伸べる必要だと思いま
す。私も英語を話すことはできないけれど、
困、っている人を見かけたらずくに駆け付け
てあげたいです。

参列した平和祈念式典にも様々な国から人
が集ま、ていました。皆戦争のない平和な世
界を願、てきていたと思います。同じ思いを
持つ人ももっと増やすために自ら海外のこと
を勉強していき関わ、ていきたいです。

「平和大使」を経験し、私は家族や友達、
身の回りの人などにも、と優しくでるよう
に、意見が違、た時には相手の話を聞いて、
自分の意見も伝え、話し合うことが大切だと
思いました。

「平和大使として学んだこと」

平和をっなく



南流山第二小学校 5年 氏名 本村 芽衣子

私の母は新潟県長岡市で生まれました。長岡市では慰霊・復興・平和への祈りを込めた花火を毎年打ち上げています。今年も無事にみんなが集まり、花火を見ることができました。平和な時代だからこそできることだと思います。

長岡花火を描いた画家の山下清さんは、「みんなが爆弾なんかつくらないで、きれいな花火ばかりつくっていたら、きっと戦争なんか起きなかっただんだね」

という言葉を残しました。私もそのほうが平和だし、みんなが幸せになると思います。

戦争を始めようと思う人がいない世界、核兵器・爆弾のない世界にしていくために、これから平和大使として学んだことをいろんな人に伝えていきたいと思っています。

「平和大使として学んだこと」

「語りつぐ未来へ」

南流山 小学校 6年 氏名 畑中 朝陽



ぼくは今年の夏、流山市平和大使として広島へ行き、貴重な体験をしました。広島に行く前は、教科書やテレビでしか知らなかった「戦争」や「原爆」のことが自分とは遠い世界のことに感じていました。でも、実際に広島へ行きたくさんのことを学んで、その考えが大きく変わりました。

被爆体験しよう者のお話を聞いたり、当時の写真や映像を見たりして、原爆のおそろしさや被害の大きさを知りました。平和記念

資料館ではたくさんの写真や遺品があり、どれも目をおおうようなものばかりでした。焼きこげたお弁当箱、熱によって溶けてほろぼろになった服、放射線で皮がむけて死んでしまった人もいました。いつも通り暮らしていた人々が、いっしょ人にして亡くなっ、しまったことに胸が張りさけろうになりました。年々と被爆者の人数が減っ、つまっています。

たとえ被爆の体験がなくても、八月六日に広島で起こったことを記憶し、絶対に忘れず伝

えていきたいです。

「核兵器のない世界」「戦争のない世界」は戦後八十年たった今でも実現出来ていません。でも世界中の人々がおたがいを思いやり、助け合う気持ちを持つばきっと叶えられるはずです。子どもであるぼくたちも平和のために行動することができます。一人一人が周りの人を大切にするところから平和は始まると思います。

平和大使の活動を通して、ぼくは「平和」

とは何かを自分なりに考えるようになりました。戦争をしないためには、どうすればよいのか。それは、「やさしい気持ち」を積み重ねていくことではないでしょうか。意見が違っても受け入れて、しっかりと話し合い、そしてみんなで仲良くすること。それが平和な未来をつくるためにぼくたちができることなのだと強く思いました。この経験を生かして、学んだことを忘れずに、学校生活に役立てていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

広島で学んだ戦争について思ったこと

熊ヶ山奇

小学校

6年

氏名 別府 京祐



広島で学んだ戦争について思ったこと
八十年前の広島に起きた悲しい出来事は想像
をこえる内容だった。第二次世界大戦争につ
いて学んできたつもりだったが、実際に広島
へ行く被爆体験伝承者の話を聞いたたり、
平和記念資料館を見学して教科書には書いて
いない現実を知り、もっと知るべきことや伝
えるべきことが沢山あったのだと考えること
になった。
世界でも唯一日本の広島長崎へ落とされた
原爆は罪のない多くの人の命を奪った。
爆心地から離れた地帯の人でもひどいやけ
どで皮膚がたなれたかき水を求めて歩く人
は放射能を小くんでいることも知らずにい
てくる黒い雨を口を開けて飲んだことによ
って被爆して亡くなった人々の資料を見た
光景は地獄のようであれられない。そして
分かこの場にいらなにもできずにその場で
たがふことができなかった。たがうと思
った。今の平和な日本があることに感謝し、

広島で学んだ貴重な体験を家族や周りの人に
伝えていきたい。
ぼくは平和な日本で生まれ育ち、戦争の
日常生活が当たり前だと思っっていたけど、
たの八十年という自分の祖父の生きた時
代で起きた悲しい出来事を忘れずに今後くり
返すことのない様に戦争を知らない周りの人
にも伝えていこうと平和大使の活動を通して
強く思った。
今後は非核三原則で憲法九条により日本で
は戦争が起らないがもしあれば他国では
今だに戦争が起き核兵器を持つている国もあ
る。日本で起きた悲しい歴史から学んで世界
でも戦争が終あ、てほしいとぼくは心から願
う。
平和大使として広島へ行く、たことぼくは
変あ、たと思う。それは家族と先祖がたない
てくれた命に感謝し日々の生活を大事に一生
けん命生さようと思え方を考えることができ
た。

「平和大使として学んだこと」

対話することの大切さ

新川小学校 5年 氏名 近藤 隼



八十年前の広島の人達は今のぼく達と同じように家族と一緒にすごしたり友達と遊んだり、大人達も普段の生活をしていたと思う。けれど、八月六日午前八時十五分、広島に落とされた一発の原子爆弾により生活が一瞬にして変わった。その時何が起こったのか、生き残った人はどんな想いを背負って前へ進んできたのかを自分の目で確かめたいと思っ、ぼくは平和大使に手を挙げた。

平和記念資料館では原爆のおそろしさを目

の当たりにし、目を背けられなくなった。そこには被爆者の言葉や元の形がわからない服、八時十五分で止まった時計があり、その場の空気がまでもがその瞬間から止まっているかのようだった。悲惨な光景にぼくは泣き崩れそうになり、もう二度と戦争はおこらないでほしいと強く思った。

ぼくは今回の体験で、戦争はお互いを理解しようとして攻撃によって生まれ、そうならないためには対話が必要だということも学ん

た。対話をするることにより信頼が生まれ、相手を大切に想う。これは日頃の人間関係でも同じことがいえるのではないかと考えた。お互いに足りないものを補い合い支え合いながら認め合う、きっとこれが多様性を認めるということで、相手の状況や言葉の奥にある心の声に耳をかけたおけることが本当の強さにつながる。思いやりをもっと話し合えばだれも悲しまない世界になるのではないかとぼくは思った。

広島平和公園で見上げた空は澄んでいても穏やかに感じた。そこにある全ての悲しみをおぼるように。きっとその土台には悲しみを背負いながら前に進んできた人達の平和への願いがあり、その想いをぼく達は受け継いでいかなければならないと思った。全ては知ることから始まる。原爆のこわさを、広島が八十年間受け継いできた平和への願いを多くの人にぼくは伝えたい。そして心の声に寄りそう気持ちを大切にしていきたい。

「平和大使として学んだこと」

平和大使になって

おおたかの森 小学校 5年 氏名岡部 珠季



「平和大使」の活動を終えた今、私は、改めて強く感じています。八十年前の八月六日に、現実にはアメリカから原子爆弾が投下されたことを、この平和大使に応募するまで知りませんでした。広島に原爆が投下され、多くの命が一瞬で奪われ、家族を失い深い悲しみに沈んだ人が大勢いるのに、その事実を知らずに過ごしてきた自分に気づき、もっと深く学びたいと思っただけです。

出発のときは、仲間と会える楽しみや新しい経験への期待で胸がいっぱいで、心はとても軽く、見る景色も輝いていました。しかし、広島で語り部の方の体験を直接聞いた瞬間、空気が変わり、心は重く沈みました。高橋さんが語った「原爆後、六歳から十一歳の子どもは山に捨てていた」という言葉に強い衝撃を受けました。もし自分がその場にいたら、食べ物もなく、ひとりぼっちで命を落としていたかもしれない、そう考えたとき、胸が締めつけられ、涙がこぼれ上がりました。

原爆の子の像の前では、遠くから千羽鶴を持。て訪れる人々、鐘を鳴らす外国人、障害のある人たちが工夫して鶴を付せんに作り変えたり、色とりどりの鶴が風に揺れ、その一つ一つに平和への強い願いが込められているのを感じ、心が温かくなりました。その光景は、国や立場を越えて平和を願う人々の心がつながる瞬間のように思えました。

同時に、原爆を投下したアメリカの人々は広島で何を感じているのかが気になりました。「原爆はあ、てはならない」と、同じ思いを持。ていてほしいと願います。式典で誓いを述べた小学生たちが語ったように、私もこの経験を胸に、平和を守り、未来へ語り継ぎ、一人一人が笑顔で生きられる世界をつくっていききたいです。

「平和大使として学んだこと」

平和は一人ひとりの原真い

西初石 小学校 五年 氏名 菊地 美織



私は広島を訪れて、戦争や原爆のことを学びました。教科書や本ではわからない本当の重みを感じました。平和記念式典では、朝早くから多くの人達が集まり、静かに祈りをささげていました。その空気はとても厳かでした。原爆資料館では、黒く焼けたお弁当箱や溶けたガラスびん、被爆した衣服などが展示されていて、どれも目をそむけなくなるようなものでした。中でも死の斑点が出た兵士の写真が心に残っています。七くなる二日前から歯ぐきの出血が止まらず、顔や上半身に無数の血の斑点が現れました。七くなったら人間のことを想像してしまい涙があふれそうになりました。また、伝承者の方のお話を聞きました。被爆した時、なにがあっただか、七くなったら後はいまだここに居たのか、また、生き残った人々はどのように悲しみを乗り越え生活してきたのか、重く悲しい話でしたがその中には「二度と同じことをくり返さないでほしい」という強い願いがこもっていました。

た。平和大使の体験を通して、平和がどれほど大切であるかを知りました。今の日本は、80年間もの長い間、戦争を知らず、平和を保っています。がそれは決して当たり前のことではありません。戦争、原爆の悲しさ、恐しさを反省し、二度と戦争はしないと決め、行動しているからです。私は戦争を知らない世代です。今まで保ってきた平和をするために、自分が学んだことを家族や友達に伝え、平和の大切さを語りついでいきたいと思っています。戦争や原爆のことを知らないままだと、それは遠い昔の出来事や、物語のように感じてしまうかもしれません。でも私達が戦争について知り言葉にして伝えていくことで一人でも多くの人が「平和ってなんだろう」と考えるきっかけになると思います。たとえそれが小さな一歩でも平和は、そんな一人ひとりの思いから始まると信じています。

「平和大使として学んだこと」

広島が伝えたい「本当の平和」

東 小学校 6 年 氏名 豊原なのは

私が広島で見たり聞いたりしたものは、耳をふさぎたくなったり、目をつぶりたくなったりするもので、とてもおそろしいものでした。

私は伝承者の高橋さんから被爆者の山本定男さんの話をたくさん聞きました。八月六日午前八時十五分、空で何かがピカッと飛びそのしゅんかん、ドーンという大きな音と共に、とても強い爆風がきたそうです。山本さんは、草野原に飛ばされ、気がついた時

には、広島市内全体が焼け野原になっていて人々のひふはたれさかり、男女の区別もつかないようになていたそうです。

資料館には、たくさんのお絵や写真がありました。水をほしがると人の絵、まるでこげたとウモロコシのようなやけどをおおった人の写真。私は資料館を出た後も、あまりのおそろしさに、体がふるえ続けていました。

「平和大使」を終えた今、私が一番伝えたいのは、もう二度と、絶対に核兵器を使っ

てはならないということ。私は、広島に行くまでは想像を、こわいものとしてしか考えていませんでした。ですが広島に行くと聞いた話、見た物は、非人道的な核兵器による地獄のような景色であり、私の想像していたものをはるかに超えるものでした。みなさんは想像したことはありませんか？自分の大好きだった場所、家人。これらがたの一秒ひろばわれてしまうのです。そして例え生き残ったとしても、後いしように何年もの苦し

みが続くのです。今の私の原爆への思いは、二度と使ってはならないもの」と大きく変化しました。

今、ロシアやアメリカなどは、自国を守るために核兵器をたくさんもっているとお母さんが教えてくれました。しかし、それらの国は、核兵器が使われるとどういふことが起こるのかを本当に深く理解した上で、核兵器を持つ、こいるのでしょうか。もっと深く理解していれば、核兵器を持つ国は減るはずで

「平和大使として学んだこと」

広島が伝えたい「本当の平和」

東小学校 6年 氏名 豊原なのは

核兵器を持たない、使わない。これが広島が
願う本当の平和だと思います。

最後に、私は広島で通りすがりのおじさん
から、原爆が落とされる前の原爆ドームの写
真をもらいました。おじさん、しよにりたつき
そいの方が、

「き」とおれ達のような人に広島を知って
もらうために配っているんだ。」

と言っていました。被爆者の山本さんも、自
分の体ではもう無理なので、高橋さんに伝

してもらっているそうです。通りすがりのお
じさん、高橋さんも、広島が思ひかたえ

ないようかんばっています。「あ、います。資料
館も、原爆を決して許さないう、強いメッ

セージを送っています。私にできることをし
て、私はまず身近な家族に伝えました。原爆

のことを。とたくさんの人に伝えていきたく
いです。私は、広島からのメッセージをどう

受けとるか、そして、自分になにかできるか

を、考え、実行すること、被爆者の方達の

思いを次の世代へつないでいけるのではな
いのでしょうか

「平和大使として学んだこと」

学んだことを伝えていく

八木南 小学校 5年 氏名 多田実乃理



「平和大使」を終えた今、私が強く思うことは、私が広島で見た、聞いた、感じたことも家族や友達など、まわりの人に伝えて核兵器をどうしたらなくせるか、考えようということです。被爆者の方達は高齢化が進み、だんだんと原爆が投下されたときのことをしている人が少なくなっています。だからこわい私達が語りついでいきたいと思います。私が広島へ行き、特に印象に残ったものは、二つあります。一つ目は、平和記念資料館です。大やけどをおった人の写真、ボロボロの三輪車、血のついた服など、しっかりと見ることでぎさいものがたくさんあり、これを見てチラッとしか見れませんでした。他にも被爆前の広島市の街の写真があり、たった一発の原爆で、こんなにたくさんのもので壊れてしまったというところでも信じられずに写真の前で立ちどまり、動けなくなりました。二つ目は、被爆体験伝承者の方から、中学校二年生のときに被爆した、山本さんの話を聞

きました。山本さんは、東練兵場というところで被爆したそうです。ピカッと光り、首のところが熱いと思った瞬間、ふっとぼされたし、言っていました。家に帰ったら家族は全員無事だとわかって、私はほっとしました。きっと、家族が全員亡くなってしまうという人もいたと思います。その他にも、全盲が亡くなってしまう、た一年生の話や、お母さんにたのまれて親せきをさがしにいったことなどを聞きました。最後に、

「意見がわかって、殺し合いをせずに話し合ってください」

と、言われました。私は、友達や家族と意見がわかって、けんかをしてしまったり、話し合いをしないこともあるので、もし、意見がわかって、まず、話し合おうという気持ちや大切にしていこうと思いました。

私は、平和大使として広島に行って学んだこと、写真をおせたり、話をしたりして記念資料館で見た原爆の悲惨さや、言葉では

「平和大使として学んだこと」

学んだことを伝えたい



小学校 年 氏名 99 田

表れないほどの恐ろしさ、山本さんの思いが
だと伝えます。広島であったことを知るのも
核兵器をなくすためには大事だと思っからで
す。これから先、私は同じあやまちをくり返
さないように努力し、行動して、世界中の人
とともに、あの日にあつたことをわすれが
に、平和な世界をつくる第一歩につなげてい
こうと思います。

